The American の遍歴（I）[1]

水　野　尚　之

Henry James の作品の中で，*The American* ほど最終的な形を取るまでに紆余曲折を経たものも少ない。この作品が成立していく過程をたどる時，そこにあらわれてくるのは，後期の完成された芸術家といった感を与える James ではなく，さまざまなジャンルの創作をすることによって彼なりに自らの途を模索している職業作家の姿である。

James が *The American* の着想をどこから得たのかは必ずしも特定できないが，1875年10月から翌年12月までの1年余りにおよぶ彼のパリ滞在中の見聞が，この小説に豊富な資料を提供することになったとは言うことができよう。[2] このパリ滞在中に James が Flaubert や Turgenev, Zola, Goncourt, Daudet などといった文学者たちと交際したことはあまりにも有名である。この期間に James は月刊誌 *Atlantic Monthly* に連載するために *The American* を書き続けているわけであるが，一年にわたる連載の間に，主に身近な読者から意見や注文が作者の許に寄せられてくる。その中には，この小説の結末として Christopher Newman と Claire de Cintré の結婚を期待する声もかなりあったようで，これに対する James の返答の手紙が何通か残っている。中でも，James が自分の小説のプロットの必然性を弁明する必要を特に強く感じたのは，雑誌への連載を引き受けてくれた編集者 William Dean Howells に対してであったようだ。Howells 宛ての次の手紙は，そのまま *The American* についての実作者の適切な解説と読むことができよう。

> I quite understand that as an editor you should go in for "cheerful endings"; but I am sorry that as a private reader you are not struck with the inevitability of the American dénouement. I fancied that most folks would feel that Mme de Cintré *couldn't*, when the finish came, marry Mr. Newman; and what the few persons who have spoken to me of the tale have expressed to me (e.g. Mrs. Kemble t'other day) was the fear that I should really put the marriage through. *Voyons*; it would have been impossible: they would have been an impossible couple, with an impossible problem before them. For instance—to speak very materially—where would they have lived? It was all very well for Newman to talk of giving her the whole world to choose from: but Asia and Africa being counted out, what would Europe and America have offered? Mme de Cintré couldn't have lived in New York; depend upon it; and Newman, after his marriage (or rather *she*, after it) couldn't have dwelt in France. There would have been nothing left but a farm out West. No, the interest of the subject was, for me, (without my being at all a pessimist) its exemplification of one of those insuperable difficulties which present themselves in people's lives and from which the only issue is by forfeiture—by losing something. It was cruelly hard for poor N. to lose, certainly: but *que diable allait-il faire dans cette galère*? We are each the product of circumstances and there are tall stone walls which fatally divide us. I have written my story from Newman's side of the wall, and I understand so well how Mme de Cintré couldn't really scramble over from *her* side! If I had represented her as doing so I should have made a prettier ending, certainly; but I should have felt as if I were throwing a rather vulgar sop to readers who don't really know the world and who don't measure the merit of a novel by its correspondence to the same.[3)]

Newman と Cintré 夫人の結婚がありえない理由として，James はまず現実問題としてこの二人には住むべき所がないことを挙げている。(「Cintré 夫人がニューヨークに住むなどということはできなかったであろうし，結婚後に Newman が（あるいはむしろ結婚後に Cintré 夫人が）フランスに住むなどということも不可能であったろう」）続いて，自分は悲観論者ではないが，とことわった上で，James は自分にとってこの主題の興味は実人生において現われてくる打ち勝ちがたい困難のひとつを例証することであった，と述べる。そし

て，そのような困難を脱け出す途は喪失による他ない，という箇所などは，*The American* にとどまらずこれ以後書かれた James の多くの小説が主人公の諦めで終わっている，という印象を裏付けるものとも思える。さらに「我々はそれぞれに環境の産物であり，我々を決定的に隔てている高い石の壁がある」という表現は，これ以後書かれることになる *The Portrait of a Lady* やさらに後の *The Wings of the Dove* の世界――そこでは，まさに環境の産物といった登場人物たちを，実際の建物や壁が精神的にも閉じこめあるいは排除する――をすら何やら暗示しているように思われる。*The American* では James は壁の Newman 側（「視点」についても意識しての表現であろう）から描いた。そして，Newman と同様読者にも Cintré 夫人の側の世界は分からないのはもちろんであるし，まして彼女がその壁を乗り越えてこちら側にやってくる，などということは考えられないのである。

この手紙を読む限りでは，なるほど Newman と Cintré 夫人を結婚させるなどということは，「世の中のことをよく知らず，小説の価値を実人生との適合によっては判断しないような読者に，かなり俗悪な飴玉でも投げてやる」だけのようにも思える。感傷的な読者に迎合することを James が嫌悪していたことは，このような書き方からも充分にうかがわれることは事実である。しかしながら，たとえ結末が James の言うように読者の実人生の感覚に合うようになっているとはいえ，この小説はそもそもロマンス仕立てであり，すべての事件が結末に向かって見事に収束していくプロットには，メロドラマチックとも言われかねない要素もある。たとえば，主人公 Newman がたまたまはじめに知り合った Noémie Nioche がやがて Newman の婚約者 Claire de Cintré の実の兄 Valentin の人生を狂わせる女性になっていく，という筋立てもかなり強引である。また，自分の妻に殺されかけていた Bellegarde 侯爵が，たまたまその妻がいない時に息を吹き返して真相を紙切れに書いて信頼できる女中の Bread 夫人に託し，今度は Bread 夫人が Newman を信頼してその紙を渡す，

という展開も少々できすぎの感がある。さらに，物語の冒頭ではあやしげな目的を抱いた Noémie がルーブル美術館でムリリョの聖母マリアの模写をしているのに対して，この物語の結末においてはカルメル会の修道女となった Cintré 夫人が聖母マリアに祈りを捧げる日々を送っている，との報告がなされており，奇妙な対照をなしている。また，物語の構造の対称性について考えるならば，冒頭において Newman の前に名画の模写の真似ごとをしている女性として登場する Noémie は，最後には Cintré 夫人の再婚相手として Bellegarde 家が期待していた Deepmere 卿の愛人として，ロンドンの公園で落胆の極みにある Newman の前に着飾って現われるのである。このような幾何学的ともいえる構成は，James のこれ以後の作品についてもたびたび議論されてきた（そして多くの場合是認されてきた）問題ではある。しかしながら，*The American* の場合はやや極端なまでに筋の展開が見事になされていくのであり，結末にのみ主人公の幸福な結びつきを求めるという感傷的な読者は論外としても，このような筋立てが，James が望んでいるような「世の中のことをよく知」っていて「小説の価値を実人生との適合によって判断」する読者を満足させるものになっているかどうかは疑わしい。そして，少しきびしい見方をされればメロドラマチックとも言われかねないこのような要素がより明瞭な形で露呈してくるのが，*The American* が劇として書き直された際なのである。

James の劇作については，1895年に *Guy Domville* がロンドンの劇場で上演された際に挨拶に出た James が観客から罵声を浴びせられたという事件のみがあまりにも有名になりすぎて，他の作品についてはほとんど触れられることがない。しかし，たとえば *The American* の場合をたどっても，また別の興味深い問題が浮かび上がってくる。James は実際にはすでに1869年から数本の戯曲を書いており，“Daisy Miller” の脚色も行なっているのだが，彼の本格的な劇作活動は *The American* の脚色から始まる。1889年に James は，10年ほどイギリス各地を巡業している劇団から *The American* を脚色することを依頼され

Christopher Newman 役を演じる
Edward Compton

る。この劇団を主宰していたのは Edward Compton という俳優であるが，Compton は *The American* の地方での上演を成功させてロンドンに進出し，ウエストエンドに自らの確固たる地位を築こうという野心を持っていた。幼ない頃から芝居が好きで，やがて劇評などを書いているうちに演劇という分野に本格的に取り組んでみようと思うようになった James と Compton の野心は，この時点では同一の方向を目指していたといえよう。James は 4 か月ほどで *The American* の脚本を仕上げたが，この劇にははじめは *The Californian* という題名がついていたという事実も指摘されている。[4] この劇が実際に上演されるに至るまでの James のこの劇とのかかわり方は決して中途半端なものではなく，彼はリハーサルに立合って俳優にあれこれと指示を与えている。特に Christopher Newman の役を務める主宰者の Edward Compton に対しては，カリフォルニア出身の Newman の発音をこまかく指導している。ヒロインの Cintré 夫人役は，Compton の妻であるアメリカ人女優 Virginia Bateman（実は彼女が *The American* の劇化を思いつき夫に James 宛てに手紙を出させた）が演じた。こうして戯曲 *The American* は，1891年 1 月リバプール近郊の保養地サウスポートで上演されることになった。

ここで実際の戯曲がどのようなものになっているか見てみよう。この劇は 4 幕物として構成されているが，小説と違って Newman の confidant(e) の Tristram 夫妻が全く登場しないために，Newman が常に自分のまわりの人々に直接交渉しているという印象を与える。すなわち，すべての人物がいとも簡単に Newman とかかわりを持つような仕組みになっているのである。たとえば，冒頭近くでは次のように人物関係ができていく。

> NIOCHE. (*Centre.*) Bonjour, M. le Comte. I salute you very low.
>
> VALENTIN. M. Nioche is always saluting low. You'd salute the executioner if he were going to break you on the wheel.
>
> NOÉMIE. (*Looking into the basket while* NIOCHE *polishes his hat with his handker-*

chief.) Well, you won't be tortured for stealing, at any rate. Three unhappy little cutlets! If the Count stays there won't even be one apiece.

VALENTIN. The Count will certainly stay.

NIOCHE. (*Putting on his hat again.*) Then I'll go and get another cutlet. (*Goes to door, right.*)

NOÉMIE. It doesn't matter (*picking up basket and contents and going up centre*) we've got half a cold pie. Mr. Newman knows the difficulties of our life.

VALENTIN. Assuredly, since he comes to relieve them. (*The bell rings again, pretty loud and sharp.*) There he is, the ministering angel.

NOÉMIE. Coming! (*Exit, centre, with the basket and parcel.*)

NIOCHE. He *is* a philanthropist, M. le Comte. (*Fumbles out snuffbox.*)

VALENTIN. And what am I then?

NIOCHE. (*Taking snuff.*) You're the purest relic of our old noblesse.

VALENTIN. Rather an object for philanthropy!

(*Re-enter* NOÉMIE, *centre; enter, behind her,* CHRISTOPHER NEWMAN, *with hat and stick.*)

NOÉMIE. This way, Mr. Newman! (*Pointing to the picture on the easel.*) There's the little thing you took such a fancy to.

NEWMAN. (*Looking at picture.*) That's just what I want to see! (*Stands before picture.*)

NOÉMIE. I think I've improved it.

NEWMAN. Well, yes, I suppose you've improved it; but I don't know but I liked it better before it was quite so *good!* However, I guess I'll take it. (*Goes to right.*)

NOÉMIE. (*Advancing, centre.*) There are plenty more in the other room. (*Pointing centre.*) The light's better there.

NIOCHE. (*Obsequiously, to* NEWMAN, *dusting and giving him chair, right centre.*) I feel it a great honour to receive my munificent patron in my humble home.[5)]

場面は Nioche 老人と Noémie の住居である。Newman は Noémie に注文しておいた絵の出来ばえを見るために直接ここにやってくる。しかし，彼よりも先にすでに Valentin が来ており，Valentin は Newman を出迎えつつ Nioche 父娘の Newman に対する応待のしかたに皮肉な感想を述べる。Newman と初対面の挨拶をした Valentin はまもなく退場するが，今度は Nioche 老人が残った

Newman に Valentin の妹の Claire について教えるばかりか，Bellegarde 家の暗い過去についての噂話をするのである。上に引用した場面についてもうひとつ注意すべきは，これがいわゆる dramatic irony を生み出す状況となっている点である。すなわち，先に来ていた Deepmere 卿が，Noémie の機転でこの居間から追い出されて外で待っているのである。居間の外にいる Deepmere 卿が，あとから来た Valentin や Newman と Nioche 父娘の会話をどの程度盗み聞きしているのかは必ずしも明らかではないが，舞台を見ている観客は，居間の4人の会話の外に Deepmere 卿の存在があることを意識せずにこの場面を見ることはできないだろう。主人公 Newman をいわば外側の枠から眺めているといったこのような演劇的技法は，作品の視点を主人公 Newman ひとりに固定している小説の場合とは大きく異なった効果を生むことになる。

この他，Noémie の性格づけや Valentin の決闘の相手や場所などの点で劇と小説とに明らかな相違が見られるし，小説の中ではかすかな可能性として述べられていた二つのおぞましい関係——Bread 夫人と故 Bellegarde 侯爵との関係，そして侯爵夫人と Cintré 伯爵との関係——が，劇の中ではあからさまに暴露されている。そしてこうした相違点の中でも最もきわだっているのが結末の場面である。

Newman は，Bread 夫人を通して亡き侯爵が書いた紙切れを手に入れるが，小説の場合とは違って，それを返してほしいと言うのはまず Claire である。そしてすぐに兄の Urbain もこれに加わり，三人が紙切れの取り合いをするという少々滑稽な立ちまわりを演じる。Newman は結局 Urbain に紙切れを渡す。以下の引用はその直後からである。

> CLAIRE. (*Right centre, watching him.*) I was right, I was right—you're magnanimous!
>
> NEWMAN. (*With a flicker of returning hope.*) Ah, Claire—don't say such things *now!*

CLAIRE. Now is just the time—as the carriage is there!

NEWMAN. (*Eagerly.*) The carriage? (*Re-enter the* MARQUIS, *right.*)

MARQUIS. (*To* NEWMAN.) You had really better leave the family to itself. My mother's coming.

CLAIRE. (*Giving her left hand to* NEWMAN.) Tell her when she comes that I shall marry Mr. Newman.

NEWMAN. Ah, my beloved! (*Kisses her hand.*)

CLAIRE. You've done it—you've brought me back—you've vanquished me!

NEWMAN. That's just what I wanted to see! (*He has caught her with one arm, and gives her a long kiss. He hurries up with her—exeunt rapidly left upper entrance. At the same moment re-enter* MME. DE BELLEGARDE, *right, breaking in with the letter that* NEWMAN *has given the* MARQUIS, *open in her hand.*)

MARQUIS. He's gone—but she's gone with him!

MME. DE BELLEGARDE. (*Crossing swiftly to one of the lighted candles that stand on a table at left and thrusting her paper straight into the flame.*) May they never come back—may they never come back!

MARQUIS. (*On the other side of the stage, watching the paper burn while the Curtain falls.*) Any more than that thing, eh?[6]

Newman は Bellegarde 家に復讐する手段を自ら放棄する。Newman のこのような高潔な態度を見た Claire は「私が思ったとおりでした。あなたは寛大です！」と言う。小説においては Tristram 夫人が最後にこれに類する言葉（"Their confidence, after counsel taken of each other, was not in their innocence, nor in their talent for bluffing things off; it was in your remarkable good nature! You see they were right."[7]「相談し合った結果ベルガルド家の人たちが自信を持つようになったのは，自分たちの無罪でも，はったりで切り抜ける才能でもなくて，あなたの稀に見る善良な性質についてでした！　あの人たちが思ったとおりですわね」）を述べるが，その場合は，おとなしく引き下がることにした Newman に対する慰めの言葉以上のものではない。さらに，劇の中では Claire は結婚を決意し，その理由として引用の中ほどの驚くべき

科白（「あなたはおやりになった――私を連れ戻されました――私を打ち負かされたのです！」）を述べる。家族と恋人との板ばさみになって，女主人公が自分の気持ちをほとんど口に出さないままに修道院に入ってしまう，という小説の結末にもやや強引なところがあるが，劇における女主人公の上のような論理も，また別の意味で不自然であるという印象を与える。結局劇では，引用の最後に見られるように，Bellegarde 侯爵夫人が紙切れを燃やし，息子の Urbain ともども秘密が外に漏れなくて安堵するというところで幕となる。

戯曲 *The American* の地方での公演はおおむね成功であった。そして25回の地方公演を行なったのち，Compton Comedy Company はいよいよロンドンに進出することになった。Newman の役はやはり Compton が演じたが，Claire 役は当時 Ibsen の *Hedda Gabler* で頭角をあらわしつつあったアメリカ人女優 Elizabeth Robins が演じることになった。劇場は，初期の Gilbert と Sullivan のオペラが演じられていた Opera Comique Theatre である。ロンドン初演の観客の中には John Singer Sargent や Constance Fenimore Woolson の他に Arthur Pinero や George Meredith もいたし，後には Arthur Symons もこの劇を見ている。Symons などは「この劇がこの小説の作者を満足させたなどと考えられるだろうか？」("Is it conceivable that the play satisfied the author of the novel?"[8]) といった辛辣な劇評を書いているが，戯曲 *The American* がロンドンでもかなりの評判を呼んだことは事実のようである。そして上演が50回を数えようとする時，James は主に第3幕を書きかえて再び批評家たちを招いている。

こうして *The American* のロンドン公演は70回を数えたが，主宰者の Edward Compton がロンドンで確固たる地位を築くというところまではいかず，結局この劇団は50ほどの上演レパートリーを持った地方劇団としてイギリス各地を巡業するというもとの形に戻る。*The American* もこの50ほどのレパートリーの中のひとつとして上演されるようになったが，ここで James はまた新

The American 第2幕
Edward Compton (Christopher Newman) と Elizabeth Robins (Claire de Cintré)

たに第4幕を書き直し，今までのものと差しかえている。この新しい4幕が前の芝居と違うのは次の二点である。そのひとつは，場面をフルリエールにある Bellegarde 家の城からパリの Newman の家に変更したこととも関係があり，ここでは決闘で死にかけていた Valentin が生き返って皆の前に登場してくる，

という驚くべき変更が行なわれている。もうひとつは，亡き Bellegarde 侯爵が死の床で書いて Bread 夫人に手渡した紙切れの行くえに関してである。第4幕の前半部分が紛失しているので後半部分から推測をする他はないが，どうやらこの秘密の紙切れはまだ Bread 夫人が持っていると思われる。Newman がその手紙ごと Bread 夫人を召使いとして雇おうとしているのを知って，Claire は彼にその試みを断念させることで一家の恥が表に出るのを防ごうとする。Claire の哀願を聞き入れて Newman が復讐を断念するのとほとんど同時に Valentin が生き返って登場してくるので，一同の注目はそちらに集中してしまう。冷酷なはずの Urbain でさえ，Claire の結婚問題よりも Valentin の回復のことに気を奪われている様子である。そして一同は次のような大団円を迎える。

> NOÉMIE. (*Aloud, so that the others hear her and* NEWMAN's *invitation to* DEEPMERE *is practically answered.*) Give me your arm! (*She takes it while* DEEPMERE, *breathing again, offers it with extravagant alacrity, and they stand together at right.*)
>
> MRS. BREAD. (*To* CLAIRE.) I *am* at your ladyship's service to leave the *house.*
>
> NEWMAN. (*Looking at* CLAIRE, *who, still seated in her agitation, has made no answer.*) Perhaps *you*, Madame de Cintré, will give us the honour of your company?
>
> MARQUIS. (*Down at left, majestically, during the silence that follows on* CLAIRE's *part.*) I regret, Mr. Newman, that I am unable to accept your invitation. (*After an instant.*) I must carry to my mother, without delay, this remarkable news of her son.
>
> CLAIRE. (*Rising rapidly, checking him as he is in the act of going, while, as she moves,* NEWMAN, *quitting* VALENTIN, *comes nearer to her, and* MRS. BREAD, *passing to centre, occupies* NEWMAN's *place behind* VALENTIN's *chair.*) Urbain! (*The* MARQUIS *stops, surprised, as with a challenge, and* CLAIRE *goes on speaking out loud and clear.*) You can carry our mother as well some remarkable news of her *daughter*—the news that I've determined—and (*looking about to the others*) I'm glad you should all *hear* it!—to become Mr. Newman's *wife!*
>
> NEWMAN. (*Springing to her, and as he folds her in his arms.*) That's *just* what I wanted to *see!* [9]

Newman に復讐の機会を断念させて一家の名誉を救ったという安堵感に加えて，死んだとばかり思っていた兄の Valentin が生き返ってきたのを見た喜びもあってであろうか，Claire は Newman と結婚する意思を公然と口にする。その勢いに押されたかのように Urbain は何も言えない。さらに，この芝居の喜劇性を徹底させているのが Noémie と Deepmere 卿の組み合わせである。小説においては，Claire と全く対照的な生き方をするしたたかなフランス女性として Noémie は充分に戯画化されて描かれているのだが，劇の中では彼女はもう少し道徳意識の高い人物となっている。軽薄なアイルランド貴族だった Deepmere 卿も同じように人格が格上げされており，彼ら二人の結びつきは，いかにも喜劇の脇筋の結末といった形で，Newman と Claire の結びつきに準ずる祝福すべきものとなっている。

このように *The American* はますます明るい作品へと変貌していく。このような変貌をとげた劇 *The American* は，もはや小説とは全く別物と考えた方がよいのかもしれない。しかしながら，そもそもこの小説の中に容易に喜劇の道具立てへと転じうるような要素もいくつかある，ということもまた事実であると思われる。物語りの中から喜劇性のみを探り出そうとする姿勢は必ずしも正確な読み方とはいえないであろうが，深刻さや悲劇性がまず論じられるような James の他の小説の場合でも，案外たやすく喜劇に転じうるものが多いのではなかろうか。

戯曲 *The American* のその後をたどろう。James は小説そのものに内在する喜劇的要素を巧みに利用して純然たる喜劇を作りあげたわけであるが，そのような喜劇ならば，もっと気のきいた科白をちりばめながら James よりももっと上手に劇を仕上げていった劇作家たちが，ビクトリア朝末期のイギリスの演劇界には沢山いた。特に，James の劇作時代が Oscar Wilde の劇作時代の全盛期にあたっていたことは，いかにも不幸であった。James 自身は Wilde に対して対抗意識めいたものを持っていたことが手紙に残っているが，[10]1892年

Lady Windermere's Fan, 93年 *A Woman of No Importance*, 95年 *An Ideal Husband*, 同年 *The Importance of Being Earnest* とたてつづけに上演を成功させてイギリス劇壇の寵児的な存在となった Wilde とは，James ははじめから比べものにならなかった。またこのころ Gilbert と Sullivan のいわゆる Savoy Opera もさかんに上演されている。このようなある意味で演劇的に大変きらびやかな時代に，戯曲 *The American* がロンドンで生き残れず，地方劇団の多くのレパートリーのうちのひとつに転落していったのも，むしろ当然であったといえよう。

さて，以上のように *The American* の変貌ぶりをたどってきたわけであるが，この作品は作者 James によってもう一度徹底的に筆を加えられることになる。それが1907年に行なわれた New York 版選集のための加筆であるが，他の初期の作品への加筆に比べて *The American* の場合はあまりに徹底した濃密な加筆が行なわれており，その是非については従来からさまざまに論じられてきている。また，この作品の場合だけは，筆者による生々しい加筆の跡を写した facsimile 版が出版されている。[11]次回はこの版を検討することにより，*The American* の最終的な変貌ぶりを考察したい。

【註】

1) 本稿は，1988年度日本アメリカ文学会関西支部臨時総会（1989年1月，於関西大学）における研究発表に基づくものである。
2) Cf. Henry James, *The American*, ed. James W. Tuttleton (New York: Norton, 1978) 321–6.
3) Leon Edel, ed., *Henry James Letters*, Vol. II (Cambridge, Mass.: Belknap, 1975) 104–5.
4) Leon Edel, ed., *The Complete Plays of Henry James* (Philadelphia & New York: Lippincott, 1949) 179; F. O. Matthiessen & Kenneth B. Murdock, eds., *The Notebooks of Henry James* (New York: Oxford U.P., 1947) 100.
5) *The Complete Plays of Henry James* 195–6.
6) *Complete Plays* 237–8.

7) Henry James, *The American* in *Henry James Novels 1871–1880* (New York: The Library of America, 1983) 871–2.
8) *Complete Plays* 189.
9) *Complete Plays* 252.
10) Leon Edel, ed., *Henry James Letters*, Vol. III (Cambridge, Mass.: Belknap, 1980) 372–3, 509, 514.
11) Rodney G. Dennis, intro., *Henry James THE AMERICAN* (Ilkley & London: Scolar, 1976).